

入門期の音楽教育における音楽と言葉との関係

関口 博子

(長野県短期大学)

1. はじめに

子ども達が最初に接する音楽、それは母親の子守歌のような歌であろう。簡単な子どもの歌は、幼児でも母親や誰かが歌っていたのを聴いて、自然に覚えて歌い出すものである。歌には、歌詞がついている。歌にとって歌詞は、音楽そのものと同様にきわめて重要なものである。歌詞をその本来の意味で正しく理解し、生かすためには、歌詞の持つ言葉のアクセントと、リズムやメロディーといった音楽とが合致しなければならないであろう。しかし私たちはふだん、そうした音楽と言葉との関係についてあまり意識することはないのではないかと思われる。

本発表では、入門期の音楽教育、特に歌唱教育における音楽と言葉との関係に着目し、それを意識する一つの事例として、ペスタロッチ主義の練習方法を取り上げる。そして、そこから今日の私たちが何を学び、取り入れていくことができるのか、ということについて考察してゆきたい。

2. 音楽と言葉との関係を意識させるペスタロッチ主義の練習方法

1810年にスイスで出版されたプファイファー (Michael Traugott Pfeiffer, 1771-1849) とネーゲリ (Hans Georg Nägeli, 1773-1836) 作成の『ペスタロッチの原理による唱歌教育論』(Gesangbildungslehre nach Pestalozzischen Grundsätzen) — 以下、『唱歌教育論』と略称 — は、音楽をリズム、メロディー、ディナーミクという3つの要素に分けて易しいものから徐々に難しいものへと練習を進める方法が、音楽の基礎練習の方法を変え、その後の学校音楽教育を近代化へと導いた一つの重要な契機となったとされている¹⁾。しかし、この『唱歌教育論』は、音楽を要素に分けて練習させるという前半の部分にのみ注目が集まっているが、その後半では、音楽と言葉との関係に焦点が当てられており、音楽と言葉の関係を意識する重要な練習方法が示されている。以下に、その方法を具体的に示したい。

まず最初は、いくつかの単語を取り上げて発音させ、強い音節と弱い音節があることを理解させる。その後、それぞれの単語のアクセントを意識させる練習として、

例えば2音節で最初の音節にアクセントがあるsingenのような単語は<譜例1>のaのような、3音節で2音節目にアクセントがあるerfreulichのような単語はbのような練習をさせるのである²⁾。

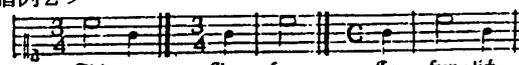
<譜例1>

a. 

b. 

同様に、Gesangのように2音節で後ろにアクセントのある単語、freudigerのように3音節で最初にアクセントがある単語など、2音節と3音節のさまざまな語を、それぞれのアクセントに合わせて練習させている。そして次に、異なった音節を持つ単語をそれに応じたリズムやメロディーにのせて歌う練習をさせる (<譜例2>参照)。

<譜例2>



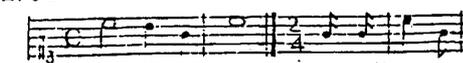
そして単語から次のような短い文章を言葉のアクセントに応じたリズムやメロディーで歌う練習へと進めるのである (<譜例3>参照)。

<譜例3>



その他、da, so, nochなど、文脈によって強く発音したり弱く発音したりする語を含む短い文章と音とを結び付けた練習も、次の<譜例4>のように行わせている。

<譜例4>



ここでの最初の“Nun ist er da”の“da”は、「今彼はそこにいる」の「そこ」であり、したがって最も強く発音されるべき重要な単語として2分音符でc²というリズムと音高になっているが、次の“da entschwand er”の“da”は、「しかし彼は消えた」の「しかし」という接続詞の役割を果たし、強く発音する単語ではなくなる。

このようにここでは、単語のアクセントに応じたメ

ロディーやリズムの練習だけではなく、文脈に応じた練習もさせているのである。

3. ペスタロッチ主義の方法の特徴とその応用

以上のように、ペスタロッチ主義の方法では、単語あるいは文章で、アクセントのある部分は高音かつ長音（2分音符など）で、アクセントのない部分は低音かつ短音（4分音符、8分音符など）で歌わせており、それによって言葉と音楽とがぴったり合致して歌詞の内容もきちんと理解でき、歌詞に合った表現ができるようになることがめざされている。このような方法では、まず歌詞があり、その歌詞のなかの単語のアクセントと文脈によってリズムやメロディーのパターンが決まってくるので、子ども達が簡単な歌を創作する一つの重要な手掛かりにもなると思われる。また、言葉を正しいアクセントで発音し、文脈をきちんと理解することは、幼児にとっては音楽教育にとどまらず、言語教育としても意義深いものであろう。

もちろん、ペスタロッチ主義の方法は、ドイツ語の歌詞を用いたものであり、それを日本語にそのまま当てはめることは適切ではないが、しかし参考になることはあるであろう。ドイツ語ほどはっきりしていないとはいえ、日本語にも音節やアクセントがある。例えば、〈譜例1〉のsingenの練習を、singenと同様に2音節で最初の音にアクセントのある「ねこ」に、erfreulichをそれと同様に3音節で2番目の音にアクセントのある「こねこ」に置き換えて練習することは可能であろう。

4. むすび

本発表では、入門期の音楽教育において、歌における音楽と歌詞との関係を意識させる一つの重要な練習方法として、ペスタロッチ主義の方法を事例として取り上げ、その特徴について考察し、そこから私たちがどのようなことを学び、取り入れることができるのかということについて考えてきた。

ルソー(Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778)は、『エミール』(Emile)のなかで、「[子どもは—引用者]自分の理解できないことに調子をだしたり、一度も経験したことのない感情に表現をあたえたりすることはできまい」³⁾と述べている。実際には、歌詞の内容が分からなくても子どもは歌うことはできるであろうが、教育的効果という点では、やはり歌詞の内容がきちんと理解できたほうがよいであろう。また、本発表で取り上げたペスタロッチ主義の方法を考案した

ネーグりは、「子どもは、実際に自分自身が持っているもの、つまり自分や自分のまわりのものを最も好んで歌う」⁴⁾と述べ、子どもが自分に身近なものを歌いたがる傾向を指摘している。

子ども達が歌詞を正しく理解できるかどうかということは、歌詞の内容が子どもに理解できるものであるかどうかということがもちろん大前提ではあるが、歌詞のアクセントと音楽とが合致しているかどうかということも、大いに関係してくると言えるであろう。例えば、〈譜例2〉のsingenとGesangを「ねこ」「いぬ」と歌えば猫と犬のことだとはっきりわかるのであるが、もしそれを反対にsingenの旋律とリズムで「いぬ」と歌い、Gesangの旋律とリズムで「ねこ」と歌ったらどうであろうか。その音を聴いただけでは何のことだか判別が難しいであろう。特に、言語の習得過程の途上にある幼児にとっては、本来の単語のアクセントと反対のアクセントで歌うことは、言語の習得という点でも有害なことになりかねないと言えるであろう。

今後は、本発表で取り上げたペスタロッチ主義の方法の一つの手掛かりとして、多くの子どもの歌について音楽と歌詞とが合っているかどうか具体的に検証し、子どもに合うよい歌とはどういったものであるのかということについて、音楽と歌詞との関係という視点から考察してゆきたい。さらに、歌詞の内容と言葉のアクセントに合った子どもの歌の創作も試みてみたい。

註および引用文献

- 1) 『唱歌教育論』について筆者は、以下の拙稿においてより詳細に論じている。またその全体構成と概要も同拙稿にまとめてあるので『唱歌教育論』に関する詳細は、以下の拙稿を参照されたい。拙稿「M. T. プファイファー／H. G. ネーグリー著『ペスタロッチの原理による唱歌教育論』(1810)再考—プファイファーの実践と3人の役割に着目して—」『長野県短期大学紀要』第57号、2002年12月、47-58頁。
- 2) ここに掲載した〈譜例1〉～〈譜例4〉は、以下の文献より転載した。
Pfeiffer, Michael Traugott & Nägeli;
Hans Georg. *Gesangbildungslehre nach Pestalozzischen Grundsätzen*, Zürich, 1810, S. 186, 188, 190, 192, 195.
- 3) ルソー『エミール』今野一雄訳、岩波文庫、上巻、252頁。
- 4) Pfeiffer & Nägeli, a. a. O., S. 199.